

ホームヘルプ事業推進者、
花里吉正の1941（昭和16）年
— 徴兵検査及び母の死に焦点をあてて —

中 寫 洋

『中京大学現代社会学部紀要』 第14巻 第2号 抜 刷

2020年12月 PP. 127～150

ホームヘルプ事業推進者、 花里吉正の 1941 (昭和 16) 年

— 徴兵検査及び母の死に焦点をあてて —

中 畹 洋

I. はじめに

戦後日本のホームヘルプ事業施策の定説として、「母子世帯・多子世帯の保護」から「老人世帯・障害者世帯の保護」へという対象範囲の拡大が論じられる（竹内 1974:51-69）。また、この展開において「施設収容から在宅福祉へ」という理念の転換があったともいわれる。しかし、その一方、「在宅老人の福祉は老人家庭奉仕員だけで事足りるものでなく、また達成できるものでもない」と竹内（1977:5）が指摘するように、在宅福祉の担い手としてホームヘルパー（現、訪問介護員）のみでは十分とは言い難く、少なからぬ限界や課題もみられた。この指摘をした竹内吉正（1921.1.15-2008.12.14, 旧姓花里、以下、花里）こそが、上田市社会福祉協議会（以下、市社協）初代事務局長としてわが国初の組織的なホームヘルプ事業である家庭養護婦派遣事業を推進したとする論稿は少なくない（米本 1985:8-30; 須加 1996:87-122; 上村 1997:247-57; 山田 2005:178-98; 荏原 2008:1-11; 中畹 2010:71-83; 2012:75-85; 2013; 2014a・b・c:31-45; 2019:1-13 など）。反面、こうした視点をもったり、事業運営に尽力し得た彼の背景については中畹（2019:1-13）などが見られるものの、必ずしも十分な議論がなされていない。これらを解明する手がかりとなるものとして、先行研究でもとり上げられることが少なかった戦前期の花里の生活実態や思想形成を解読し得る

彼直筆の日誌が挙げられる。そこで、本稿では、中寫(2020:85-103)でとり上げられた時期に続く1941(昭和16)年～1942(昭和17)年に記述された花里日誌の分析を通じ、その内奥に迫ってみたい。

1941(昭和16)年は、日ソ中立条約調印、南部仏印進駐開始、東条英機内閣発足など、太平洋戦争勃発に向けて、まさに秒読み段階にあった。とりわけ、この頃の長野県上田市内では、生活改善・向上を目指し、工場招致策をとった結果、幾つかの工場では兵器を製造する軍需工場と化し、徐々に戦争に加担していくことになる。加えて、市営上田飛行場の建設や満蒙開拓青少年義勇軍の送出など、軍国主義のもと、多くの人々が戦地に赴き、多大な犠牲を払うことになった。当然ながら、三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所に在籍していた花里自身も、飛行機製造という形で戦争に加担し、同所では、三菱自衛防護団の一員としても活躍した。そして、いよいよ迫り来る戦闘や徴兵令書を心待ちにしながらも、不安や心配を伴う落ち着いた生活を送っていた。一方、家庭内では1937(昭和12)年9月の父親の病死ののち、子ども8人を抱えた母子家庭となった花里家において、病に倒れ、塞ぎ込む母きのいの姿が度々見られた。

その後、1941(昭和16)年10月25日、亡父に続き母親までも亡くするという惨事に見舞われた花里は、「今の儘の家の状態であれば何一つ心配なく入隊出来る。有難いことだ」などと認め(日誌:1941年11月13日)、1942(昭和17)年7月には日本陸軍飛行隊員として、東部第102部隊へと悠然と入隊していく。戦時体制へ間もなく突入という時代と戦後の平和主義・民主主義とは大きく状況が異なるものの、戦後わが国のホームヘルプ事業化の進展を花里思想を通して把握しようとする時、思想の成熟や展開を促す戦前期の彼自身の苦悩や奮闘を捉え直すことが重要である。つまり、こうした過去の実体験を明確にして初めて、戦後、彼がいかなる思想基盤を基に、熟慮や反省を重ねていくことになるのかが見えるのである。このようないねいな考察を通じ、戦後わが国のホームヘルプ事業の組織化の背景要因や思想展開のプロセスを読み解くことが可能となる。

それ故、本稿では、戦後日本のホームヘルプ事業の推進者の一人として花里を位置づけ、なかでも成人し出征を待つ身であった1941(昭和16)年～1942(昭和17)年の花里の思想展開及び生活実態を実証的かつ具体的に浮き彫りにすることを目的とする。研究方法は、その当時の彼直筆の日誌である『当用日記』(1941年～1942年、本稿では日誌と記す)、花里の履歴書(1978年2月10日付)及び筆者作成の「竹内吉正の年表」(1886年1月27日～2009年6月24日)を主に分析・引用する。

研究課題としては、1941(昭和16)年～1942(昭和17)年の花里に関し、①1941(昭和16)年元旦における彼の心情と世相を明確にすること、②1941(昭和16)年時の花里の職務内容及び研究内容を掘り起こすこと、③花里の徴兵検査結果と母親からの忠告を鮮明にすること、④現役兵としての決意と母親の死の影響について論考すること、⑤上田市内における工場招致と満蒙開拓青少年義勇軍の送出を捉え直すことの5点を試みる。なお、これら5点の解明は、旧来、詳らかにされることがなかった兵士としての花里がもっていた軍人氣質とはいかなるものであったのかにアプローチすることになる。他方、倫理的配慮としては、花里関連史料の引用許可並びに研究の範囲内での公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た(2009年10月3日)。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た(中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認)。

II. 1941(昭和16)年元旦の花里の心情と世相

1946(昭和16)年元旦を迎えた花里は、支那事変が始まり5年目を経過したこの年、教職員共済組合令や労働者年金保険法の公布などの動きがみられたなか、比較的穏やかな一日を送っていた。具体的には、病臥する母親の代わりに、兄妹たちが初詣に出かけ、各々が新年の祈願をしていたことを以下のように記している。

元朝の淑気は燦たる曙光に伴うて六八洲を訪れ、皇紀はここに光榮の

一年を加へ、支那事変は第五年に入った。自分は、愈々奮闘の二十一歳を迎ふ。古の武士は、この歳を以て偉大なる功績を残し、今尚その名、世に知られるもの多し。感激せずに居れない。冷朝から高鳴る除夜の鐘を聴く。京都の寺から打鳴らす音は、皆マイクロホンに吸収される。新春を迎ふる。新春を迎へたのだ。午前二時頃、兄一人、熱田神宮に初詣をなした。起床六時半、氏神、九屋神社に妹と共に初詣した。幾年振りか、今年は兄妹病するものなく、唯母一人が静養して居る。(日誌：1941年1月1日)

ここから、花里自身の新年の願いは具体的には計り知れないものの、「愈々奮闘の二十一歳を迎ふ」、「古の武士は、この歳を以て偉大なる功績を残し……」「感激せずに居れない」などから、名を残した古武士たちの活躍した21歳という年齢を自分自身にも重ね合わせ、花里自身も世に知られるような人物になるべく功績を残したいと想起しているのが認められる。

Ⅲ. 1941（昭和16）年の花里における職務と徴兵検査

1. 新年拝賀式における所長の三訓と将来展望

さらに、日誌を紐解くと、1941（昭和16）年1月5日まで冬期休暇を消費した花里は、翌6日に初出勤している。新年拝賀式に臨んだ花里は、「本年最初の出勤日であった。電力統制で電車少なく、遅刻はしなかったと云ふものの全く心配した。七時半より新年拝賀式あり。所長は次の三点を訓辞さる。一、長を敬ひ和衷協同背よ。一、家庭に於ては新体制を一層強硬にし、特に勤儉貯蓄に務めよ。一、工場作業上に大いに能率を上げよ、と。河合兄はじめ全員頗る健康にて出勤。年始の禮を交はす事が出来たのは誠に喜ばしい次第である」などと記し（日誌：1941年1月6日）、和衷協同、勤儉貯蓄、能率向上などを旨とする。

さらに翌月には、材科学の講師であった松永先生から、「教習所、材料

学であったが、最早終了の趣が発表された。久し振り松永先生来られ、訓話された。一、時間を厳守せよ。一、ある一時を以て、好む事物を思ふ存分やるのは大切でないか。一、多辨者は自ら身を亡す。この点につき感ずる處があった」と記され(日誌:1941年2月10日、傍点筆者)、時間を守り、多弁せず、自分自身のやりたいことを思う存分する意義を看取している¹⁾。とはいえ、「両親を比較的早く失った我々兄妹は、オーソドックスな学歴を獲得することは経済的に不可能だった」などと(宮坂編1993:345)、望むような学歴を身につけられなかった花里は、「故に身は苦しい立場にある。之れに負けてなるものか、これに勝る人物にならねばと、我はあせるばかりであるが、工業出の彼には及ばず。不愉快でならず、最近仕事上にもいやに思ふ處が多く出て来て、一人考へる様になった。YMCAに学ぶ、難しくなって来る」とも率直に吐露し(日誌:1941年5月23日)、劣等感や不快感を抱きつつも、一人熟思し、学歴では劣るものの、実力の世界では負けないう奮起しようとする。

こうした沈思黙考ののち、彼は自身の短所にも目を向け、「自分は餘りにも気がよすぎる。而して、室の導き方が悪いのでないか。結局、その根本的中心になるものが、ふらついていけないのである。自分が、人よしなるはゆらぐことなり。堅く真面目なるはいいが、もっと力のある人物になりたいものだ。管理する力ある、大なる力をもつ人格になりたいものだ」と反省する」などと記述し(日誌:1941年3月22日、傍点筆者)、真面目やお人よしのみならず、揺らいだりふらついたりすることのないよう、堅固な考えをもち、大いなる人格者となることを念願する²⁾。「人のうかれる春だ。自分は大いに学ぶべき春だ。大いにやろう」などからも(日誌:1941年3月17日)、他者が浮かれている時こそ、自分自身は勉強しようと戒める。

2. 研究命令「ジュラルミンの熱処理と組織」

ところで、1941(昭和16)年当時の花里の職務内容や研究内容はいつ

たいどのようなものだったのだろうか。『三菱重工名古屋航空機製作所二十五周年史』を紐解くと、「開発、受注、生産、販売その他経営管理活動等について振り返ってみて、一見順調な推移とみられる出来事の裏にも、その一つ一つに先輩方の血の滲むような数々の御努力と溢れる情熱があった」などとされるが（名古屋航空機製作所 25 年史編集委員会編 1983:「発刊の言葉」）、この時の花里自身の活躍を日誌から抽出すると、「午前この日なたで飛行学、流体力学を学んだ。ゆっくりした気持でやった」（日誌：1941 年 1 月 4 日）、「第二次研究命令があった。硬度試験であった。即ち、マルテンス式引掻強度、V 硬度、円錐硬度の三つの比較である。又洋書を参照せよと西山さんから云はれた」（同：3 月 23 日）、「自分に研究命令としてデュラルミンの熱処理と組織のものがあったが、朝から総動員にてこれに掛る。その目的は、徴兵検査までに提出の豫定を以て進む」（同：7 月 4 日）、「前日以来の研究命令『組織と熱処理との関係』であった」などと（同：9 月 13 日）、多様な業務のなかでもとりわけ、「組織と熱処理との関係」を中心業務としていたことが分かる³⁾。

一方、「理論的に仕事をやって行ける人無く、自分はこれに苦しむものである。やはり学校出身者が必要である」などと（同：3 月 23 日）、理論的思考の不足を危惧し、他方、「帰宅の途、自転車に乗って来た西山さんに『おいドイツ語やって居るか』と云はれて、一層之れの勉強を要求された様な感じがした」などと（同：6 月 17 日）、語学的重要性をも感得している。「自分も入社以来からすれば、いささかその方面の知識は得られたが、未だ不足に思はれてならない。勉強に熱中、出来る程嬉しく又楽しいことはないと思ふ。一日でもこの様な時間の得られるのを望む。先づ自分は省りみずして、邁進突進すべき時だ、と信ずる。学びたい、学びたい」などにも、学習意欲を充たそうとする彼の心境を看取できるが（同：5 月 22 日）、反面、実際の花里は、「勉強すべきことも又やることも多し、たまる。仕事仲間進まず、分担するを考へる」などと記し（同：4 月 5 日）、悪戦苦闘している。ここでは、「西洋偉人傳を読む。軍人ビスマルク、哲人ソ

クラテス、教育者ペスタロッチを読書した」などの記述から(同:6月16日)、哲学からも学びとろうとし、さらに、以下のように、YMCAに訪問し、体験的にも習得しようと努める⁴⁾。

・食後、ゆっくりした休で、YMCAを訪ねた。瓦町のYMCAに到着。玄関に入らうとした時、二人のキリスト教師が静かな足取りで、外出して行った。何か、やさしき又愛の籠った態度を示して、出て行った。受付にはメガネを掛けた人格のよさそうな立派な顔つきの牧師さんが居られた。そして、自分の質問に一々答へて下さった。又立派な態度で丁寧に教へてくれた。後、出て老松車庫事務所に到り、YMCA生徒は割引券買へるか尋ねて、十分な準備に懸命であった。而して目的を考へ、又勉学に励む事を考へつつ。(同:3月30日)

・YMCAに赴く。独文和澤して先づよいと云はれたが、会話して至ず、全く恥をかいだ。しかし意味は解って居たのであるが、云へず終りになって云ったのであるが、全く残念なる状態であった。帰途も残念でならなかった。(同:6月9日)

3. 母からの注意と徴兵検査合格

上記のように、哲学や語学といった分野にまで抜けつつ、職務や勉勵に奮闘していた花里は、その一方、家庭内においては8人兄妹の次男としての役割も課されており、彼は妹たちとの関わりから、家庭教育やしつけがいかに難しいのかを悟っている。例えば、「家庭教育と云ふものは、難しいものだとつくづく思ふ。妹達が楽しくて居ても我等が何かの事で叱りたくなり叱らなくてもよい事までもつい叱ってしまひ、この為、妹は変んにひがんでしまふ。この責は一に妹にあると云へるが、ある程度まで我等になるのではなからうか、と思つた。父なき我家庭に於ては、この様な事が重大視すべきものと思ふのである」などと論じる(同:1月4日)。加えて、「帰宅後、母に云はれた。お前は余りに細かい事に気がつかつて人々

にやかましく云ふが、大いに悪い事と注意された。室内のうまくいかないのもこの点にあるのではないかと、つくづく考へさせられた」などと（同：3月27日）、母親の助言からも思案する⁵⁾。

このように苦悩や自省をしていた花里は、ハワイ真珠湾攻撃開始を機に日本が太平洋戦争に突入する時期の約半年前から、「徴兵検査申告書を記入。区役所へ提出す」などと（同：6月11日）、戦闘に向けての準備を進めていた。具体的には、「独、ソ聯戦闘開始のニュースが入り、共にびっくり、どうなる事かと外交話しを進めた。而して三十分も話し合って帰った。夕食時には、昨日取って来た魚を皆、つけて宇田川さんと共に団欒の中に美味しく食した。後、お茶を出して色々話し合って全く面白かった」などと（同：6月22日）、驚きとともに外交のあり方を考慮する。但し、日は一刻と時を刻み、「講習会出席は、数日に迫り、又、徴兵検査も迫り、それ以前に一通り仕事をやらうと、張切る。その日を期待して少々身体に無理を感じつつもやる」（同：7月2日）、「徴兵検査日及出張の日近付き、その準備にかかる。先づ人事係に出頭、職業能力申告書を戴く。而して午後休勤の届、検査届等を提出。服部部長の處へ赴き、出発挨拶をなした。斯様のことにて業務の遅暖を見た。出来た報告書を提出。西山さんにも挨拶は交はした」などと（同：5日）、徴兵検査に向けてのとり組みに勤しむ日々が続く。

そして、いよいよ徴兵検査当日を迎える。山田（2005:178-98）や荏原（2008:1-11）らの研究では花里の軍人氣質や徴兵の状況を捉え切れていないため、彼の思想展開上の転換点が浮き彫りにされてこなかったが、以下から、花里自身の合格への意気込みと感謝の念を看取できる。少し長いが以下に引用する。

会社日、徴兵検査の為、休暇となる。朝まで充分寝た積りの、それでも何かぐたぐたして落付（ママ）かず、心が重い。十時頃から友達に聞いた学課試験問題の解答を纏めた。昼食後、出発に先立ち、母が学校か

ら帰宅された。而して、父の佛前に拜す。母も自分の行動を一々見て居られた。門を出る時、奥から「しっかりやって居いで」と母の声がした。心に何か強くひびくものがあった。午後一時、昭和区役所に集合、学課試験が開始された。それに学校出身者のものの多くは、書類を間違へて忘れて来た。自分もその一人であり、後提出した。十分間の試験であった。小学校だけのものは二時間位やって居た。而して中学を出て居るとなると、自らその取扱ひも異って来て、此処にも何かと学校に進められたことに感謝せねばならなくなった。後、会社に赴く。途中、熱田神宮に徴兵検査合格の祈願をなした。(日誌：1941年7月7日、鍵括弧内ママ)

さて、こうした花里の祈願は結果的には「第一種乙種合格」という形で成就し、その時の心情を彼はそのまま書き残している。次の記述は、戦後、ホームヘルプ事業の推進者となる彼が、戦時体制下でどのような軍国教育や軍人氣質を習得していたのかの一端を示唆するものであり、注目される。終戦前までの彼の思考や意志を表す数少ない記述として、慎重に検討しなければならない。

此処に自分は二十の歳を迎へたが、この間、一赤子として、父母の恩恵を身心に受け、その結果として、今回の検査結果第一乙種に合格。無事に一生忘れられぬ意義深い徴兵検査を終ったのであるが、折しも折、東京出張の命が下り、此処に一人上京出来たのである。而して今自分は宮城を拜するのであるが、斯くの如きは偶然と云へば偶然だが、自分は心から大きな感激に打たれ、全く感慨無量である。そして感謝堪へぬのである。充分なる拜裡をなして退居した。(同：10日)

つまり、「無事に一生忘れられぬ意義深い徴兵検査」や「全く感慨無量である」などの文言から、国のために尽くす機会が到来したなか、当時の軍国主義の影響を強く受けていた花里の姿が見て取れる。

IV. 現役兵としての自覚と母の死

1. 一時帰省と「現役兵證書」の到着

その後の花里日誌に目を向けると、花里は一旦上京し、「朝食は色々と御馳走して下さった。又、食後美味しいコーヒーを入れて下さった。これが最後の団欒である。小母さんは烏山の駅まで送って来て下さった。東京駅にて大忙してして列車に飛び込む。それも今まで経験したことのない様な超満員であった。何処も飛乗るに乘れない程の大超満員。ぶら下がって居る人もあった。全く避難民そのものであった」などと（同：7月13日）、当時の混雑ぶりを認めている。そして、1941（昭和16）年8月8日には、「今、我一男子此处ニ宮城ヲ拜シテ而感無量我憾ム父、喜貌ニ見不忠誠ヲ以テ皇基ヲ護ヲ誓フ 皇紀二千六百有一年盛夏 吉正作」と句作に努め（同：8月8日）、決意を新たにする。さらに、その4日後には、故郷信州にも帰郷し、挨拶周りをを行い、「朝四時近く塩尻に到着。五時半頃には松本に着き、寒さ加はり愈々故郷近し。姥捨の景色、川中島の遠眺、稲成山への下の坂風景、情操、言語に絶するものがある。午前七時に上田に安着した。徒歩にて大門町に向ふ。大門町の家口には御祖母様がきせるをふかしながら休んで居られた。次に梅子が騒ぎ立て皆は大忙で大いに喜ばれた」などと記述している（同：12日）。

なお、上記の帰郷のねらいは、当然ながら、先祖、父の墓参であり、「帰宅後、大倫寺に赴く。而して、御祖母様、潔君等、又、我御先祖様のお墓に拜り、お題目を掲げた。後、本堂にて父の佛前に参拜、徴兵検査の結果及家内安全を祈願す。之れが根本的な目的なる為、充分のお拜りをなした。途中秋山の家立寄り、お禮申上げた」などと（同：13日）、その工程を書き残している。一方、「昭和区役所より東亜智識及軍用支那語に関する講習会が開催」との通知を受けた花里は（同：7月22日）、1941（昭和16）年10月1日、ついに「徴用令書傳達さる。興亜奉公日式、規律宣誓式施行さる」と記し（同：10月1日）、正式に軍人となり得たのであった⁶⁾。

2. 母の死と実験研究の成果報告(7点)

他方、この頃の花里にとって、家庭内で病臥する母親の病状の悪化が最大の気がかりであった。ここで花里と母親との関連に注視し、特に印象的な両者の関係性が窺える記述を抽出すると、「残業して私用の学びをなして帰る。大須も賑って居る様だが、見に出て行く気はなし。又行く必要もなし。お茶を飲んで就床直前、母は一つの『バナナ』を食されて居た。寝る前に『止めたら』と自分が云ったのが変な風に意味をとられ、直ぐ様『バナナ』を放られた。自分は穴倉のずんどこに落ち込んだ様な気がしてしまった。唯、母の今の御病状からしてお勧めしなくなかったのである。前にも無理されて風邪を惹かれたのであるが、自分は斯様なことあるが故に、お止めしただけであった。自分の真意が解って下さればと残念で泣きたい位であった。入隊の前に、色々と家事のことが心配になるが、その度事毎に神佛と祈ってその御加護を請ふ。一方、大いに勉強する處があるが、仲々出来ない」などが挙げられる(同：9月22日、二重鍵括弧内ママ)。つまり、時に花里の真意が母親に伝わらなかったこともあったと考えられ、彼なりに苦悩していた。

また、その一ヶ月後には、母親の病状がいよいよ厳しくなり、「母、意識不明にて全く昏睡状態に入る。一時も手離されず、交る交る互に枕元につき看病さる。小原の小母さんも、全く心から熱中して看護して下さる。看護婦だけあって何から何までも自分でやって下され、一同それに従ひ又導かれて看護に務める」などと(同：10月24日)、皆で懸命な看病を続けている。加えて、花里自身、「病状愈々悪し。母は本当に亡くなられるのであろうか。今の我をこれだけに育成して下さった母が亡くなられるのであろうか。ある時は小遣いの一端で好きであったバナナや甘い大きいお饅頭を買って来てあげたその母が、亡くなられるのであろうか。もう一度『正ボウ』と呼ばれて褒(ママ)しい。あの喜ばれる顔がもう一度見たい。本当に亡くなられるのだろうか……、など思ふと一人、限りなき涙がこみ上げて来る。この時こそは、泣けて泣けてたまらなかつた。傍には正三兄

と妙ちゃん、小原さんのみであったからよかった。妹がいたら大変だった」などと（同：25日、二重鍵括弧内ママ）、母親への想いや愛が溢れている。しかしながら、皆の願いや奮闘むなしく、1941（昭和16）年10月25日、母きのいは49年間の生涯を閉じたのである。

母の死後に記した彼の記述を見ると、「告別式施行さる。於自宅。午后一時ヨリ二時ナリ。夕方四時頃、お骨を拾ひ、自家に帰る。葬儀は一先づ終る。夕食後親族会議が開かれた。而して今後の家事問題の根本的案が成立した。唯誠を以って我等はこの道に進めばいいのである。前途は明るい。父母は永遠に生く」などと（同：26日）、気持ちを取り直そうとしている。反面、「今日此頃の月は全く良し。母は月が何より好きで居られたが、そう思って何時しか長く、長く眺めて居る。母は何処かに居られる気がしてどうしても死なれたとは思はれず又考へられない」などと（同：11月2日）、未だに母の死を現実のものとして受け入れられていないことが読み取れる。このような心持のなかでも、花里は実験研究を継続しており、その主な成果を次の7点とする。

今日まで自分の担当した実験研究報告は次の七通となる。一、池田式汽灌水筒の損傷調査、二、マルテンス引掻硬度、円錐硬度、角錐硬度の比較試験、三、継目溶接部に於ける硬度分布ノ測定、四、温度と組織との関係、五、中央翼桁管尾翼桁管及組織全機荷重試験第一報、六、同第二報、七、ESDT管の疲労試験に於ける亀裂発生個所及びその進行発達状態の組織的調査。（同：20日）

3. 日米戦争開始とわが身の幸福

上記のような勤労の一方で、母親の死に直面していた花里だが、「現役兵證書」が到着した彼にとって、それらはある種、彼の身を軽くすることにも寄与していた。その時の心境を花里は、次のように綴っている。ここでも少し長いが、そのまま引用してみよう。

帰宅したる處、待ちに待った現役兵證書が来た。一. 入営部隊 東部
第百二部隊、一. 入営部隊所在地 千葉縣東葛飾郡田中村、一. 入営期
日及時刻 昭和拾七年九月壹日午前九時とあった。脇さんから間接に送
られて来た。早速、両親の佛前にささげ、謹んで御報告申上げた。脇叔
父さんの云はれる如く、「人に生れ来り此上無き名誉」である。父は事
の外、又母も大いに喜んで居られる事であらう。但、記書を受ける時ま
で母が居られる事と信じて居た。兵隊好きの父も自分の門出を祝って下
さることばかり思ひ込んで居たが… (中略) …。感深いものがある。母
の入院中記書が来ては心配して居たが、之れを考へれば不幸の幸であ
る。今の儘の家の状態であれば何一つ心配なく入隊出来る。有難いもの
だ。これも親類の方々、また先輩の中の人々のお蔭である。(同：13日、
鍵括弧内ママ、傍点筆者)⁷⁾

このように入隊できることを心底喜んだ花里は、さらに職場内の様子に
ついての以下のように詳述する⁸⁾。

朝早く名駅着。妹たちの土産人形と本を買ひ、辨当を手に入れ出勤す。
やや曇って居た。暫くして誰ともなく日米戦争が開始されたとやら騒ぎ
出す。八時頃には細見技師が自信たっぷりな報道を話し廻って居た。人
心動揺するも、未だ信じ切れずある程度落付いて居たが、物理試験のラ
ジオにより事実なること明確となり、その戦況が続々傳へられ三十分間
置き位にニュースが発表され、その度毎に仕事をすててラジオを取巻
く。而してラジオは黒山の人で身動きも出来ない。十一時、マイクを通
して戦争に関するニュースが傳へられ、続いて聖戦ノ大詔が発表され、
全員感激奮励を誓ふ。午後も同様、ニュースの続出にて皆はこれを巻き
汲めて聴き入る。夕方から嚴重なる燈明完成が催され、家々は眞暗みに
した。(同：12月8日)

同様に、その翌日にも「出勤しても朝からラジオが鳴き出せば皆、そのまはりに寄りこれに聴き入る。仕事も仲々手につかない様である。九時、その前に八時と云ふ様に、ラジオは一時置き位に鳴る。戦捷の報は続々もたらせられる。一同歓喜満ち満ち、大いに嬉し飛びまはらんばかりである。仕事は余り進まない。報の入る毎に、大東亜の地図を見つめ直すこの歴史的大戦争開始の感は、無我夢中で何も解らない自衛団の腕章をつけて廻る。警備係である。帰日も管制に注意する様なり。宿直者も昨日から居止り、警備に当ることになる」などと詳述している（同：9日）。

加えて、「開戦当日は非常なるものであったが、その数も比較的少なくなつたとは云へ、まだまだ澤山の人が集まる。自分もその一員である。今日此頃の楽しみと云へば、ニュースを聴くことと食事をする事及仕事が如何にもはかどって進むこと、の三つである。この楽しみをよりよく、より面白く成し遂げるには大なる専心と又努力が必要である。その専心努力の後で聴き又食する時、何とも云へぬ喜びを感じるのである」などと述べ（同：19日）、花里は、不安や心配を抱えながらも、業務に励み、食事を採り、戦況を聴取することで充足感を得ていた。換言すれば、私生活では母親の死という不幸に直面しつつも、一方で、花里自身の職務としては苦悩を伴いながらも前進し、なかでも「現役兵證書」が彼の心の拠り所となつていたと認識できる。

V. 長野県上田市における工場招致と満蒙開拓青少年義勇軍の編成

1. 工場招致

上記の経過を経て、いよいよ1942（昭和17）年7月に東部第102部隊から出征した花里は、ここから約4年間の軍人生活を送ることになる。出征中の彼の様子を記した記録物がないところに史資料的な限界が見られるが、戦局が転換した1943（昭和18）年以降、わが国の劣勢は続き、戦災を避けて大都市から地方都市への工場疎開が始まった。長野県上田市も例外に漏れず、表1のような工場招致を積極的に行い、34社の招致に成功

している。但し、このうちの少なくとも10社(29.4%)が兵器部品や軍需品を製造する軍需工場であり(表1の網掛け部分参照)、戦争に加担していくことになった。なお、軍需工場は国の指示で疎開を積極的に進めることになったという背景があり、表1の工場の大半が航空機関係の工場であり、1935(昭和15)年から1945(昭和20)年にかけて上田へ移転した工場と、地元工場が軍需工場に転換するなど、まさに軍事色一色の様相を呈していた。因みに、航空機に関する工場は1943(昭和18)年当時、東信地区全体で約200社存在したとされるが、なかでも上田市にはその約4分の1にあたる50社ほどあったと言われ(上田市誌編さん委員会編2000:106-7)、それだけ同市内における戦時色が色濃かったことが窺い知れる。

表1 上田市における招致工場一覧(1935年~1945年)

社名	製造品	適用年月	社名	製造品	適用年月
井上航空精機製作所機	航空機部品	1944.8	双葉工業株式会社	航空機部品	1945.5
日本無線株式会社 上田工場	無線電信	1943.1	株式会社三童製作所 上田工場	航空機用兵器	1943.8
日本防具工業株式会社	防空用防護具	1944.8	山洋電気株式会社 上田工場	電機機械	1943.9
小池航機製作所	航空部品	1942.11	三進航器製作所 上田工場	航空機部品	1944.5
千曲製作所上田工場	兵器部品	1942.6	株式会社三鷹金属加工所	電波兵器	1944.4
有限会社東亜兵器製作所	航空兵器	—	上田化工株式会社	防毒具	1943.3
株式会社東信電機製作所	機上電波兵器	1944.10	株式会社城南航空製作所	通信機	1944.10
笠原航空工業株式会社	航空機部品	1945.1	株式会社木町電機製作所	電波兵器部品	1945.5
鐘淵通信工業株式会社 上田工場	通信機	—	理研農村工業浦里協同作業所	兵器部品	1937.6
上田航機株式会社	航空部品	1945.1	理研塩尻工場	航空機部品	1944.7
有限会社上田機械製作所	軍需品加工	1943.9	大屋化工株式会社	合成樹脂	1944.1
上田工業株式会社	航空部品	1944.9	神科村ドリール工場	兵器部品	—
興亜学院上田作業所	軍需用包装品	1943.3	室賀鉄工所 北塩尻工場	航空機部品	1944.8
株式会社合成工業所 上田工場	航空機部品	1944.12	株式会社山本無線製作所	航空計器	1944.8
合資会社小宮山電機製作所	通信機部品	1944.2	興化工業株式会社 長野支店	合成樹脂	—
アート軽合金鑄造所 上田工場	航空機部品	1943.9	株式会社塩田工機製作所 (皇国1353工場)	木造航空部品	—
富士通電機製造株式会社 上田工場	電機機械	1944.6	合名会社増島製針所	不明	—

【出典】 上田市誌編さん委員会編(2000)『上田市誌 近現代編(7)——上田市民のくらしと戦争』上田市・上田市誌刊行会、106-7頁を基に、筆者整理。

【注】 網掛け部分は、工場名から明確に読み取れる軍需工場であることを示しており、同市内では少なくとも34社中10社(29.4%)が戦争に直接的に加担していた。

2. 陸軍大臣、荒木貞夫宛の市営「上田飛行場」献納

さらに、上田市は、千曲川の洪水により被害を受けた中之条地籍の荒地の復旧を、国の融資を得て目指したが、耕地としての再生は不適当として断念し、1931（昭和6）年には「市営上田飛行場」を開場させる。全国で2番目に作られたこの市営飛行場は、1933（昭和8）年に陸軍省（陸軍大臣、荒木貞夫）に献納され（図1参照）、以後、軍用機の飛行訓練場となる。そうしたことから、1944（昭和19）年12月9日にはアメリカ軍機の爆撃を受け、1892（明治25）年から約52年間の歴史を有した小県蚕業学校校舎を焼失するなど、大きな痛手を負う。このように工場招致の結果、戦時下では払った犠牲は少なくなく、その後の地域社会や市民生活にも大きな影響をもたらすこととなった。

陸軍大臣 荒木貞夫殿	上田市長 成沢伍一郎	右飛行場ヲ献納候也	此時価 約七万六千円	井戸 壹ヶ所	土地面積 四万九拾貳坪	一 上田飛行場	献納書
---------------	---------------	-----------	---------------	-----------	----------------	------------	-----

図1 陸軍大臣、荒木貞夫宛の上田飛行場「献納書」

3. 満蒙開拓青少年義勇軍の編成(1938年～1944年)

一方、こうした戦況悪化の影響は戦時に即応した教育方法を具体的に示したとされる国民学校にも顕著に表われ、戦時下ではとかく戦時教育が徹底された。換言すれば、学校は国民錬成道場と化し、興亜室、忠霊室の設置のほか、職員室には神棚、軍神の写真、勅語などが飾られるなど、軍特色に彩られた。他方、自由主義、個人主義などは極度に排除され、あくまでも忠君愛国、七生報国、滅私奉公、堅忍持久、一億一心などの用語が国民的信条とされた(上田小県誌刊行会編1968:1026)。

上記のような風潮のなか、長野県満蒙開拓青少年義勇軍が送出され始めたのは1937(昭和12)年のことであった。これに呼応した小県上田教育会では義勇軍の送出について格段の配慮をし、同教育会では1939(昭和14)年から1945(昭和20)年まで毎年東部町祢津の奈良原修練道場で青少年義勇軍の拓務訓練が実施され、満州をはじめ、茨城県内原訓練所、八ヶ岳農場、桔梗ヶ原農場等に男女教員を派遣して幹部講習を行うなど、義勇軍送出に多大なる尽力を払ったという(同)。

因みに、表2は1938(昭和13)年～1944(昭和19)年までの満蒙開拓青少年義勇軍都道府県別編成率であり、長野県の編成率は63.3%となっている。また、上田小県誌刊行会編(1968:318)によれば、1937(昭和12)年度から1945(昭和20)年度までの長野県全体では総数6,986人の未成年(15～16歳)を送出したとされ、教育熱心とされた同県下が戦時中には、人々の生命をかける方向に進み、甚大なる被害を被ったことは皮肉なことであった。なお、こうした日本最多の送出は戦後の猛省を求められることになる。

表2 満蒙開拓青少年義勇軍都道府県別編成率（1938年～1944年）

北海道	46.7	石川	57.3	岡山	64.9
青森	60.1	福井	64.3	広島	79.7
岩手	56.1	山梨	61.7	山口	89.2
宮城	48.8	長野	63.3	徳島	82.9
秋田	53.6	岐阜	65.8	香川	57.9
山形	63.4	静岡	75.7	愛媛	65.3
福島	61.1	愛知	67.3	高知	59.0
茨城	53.7	三重	60.8	福岡	72.8
栃木	62.9	滋賀	74.4	佐賀	38.8
群馬	49.9	京都	67.4	長崎	46.2
埼玉	50.4	大阪	69.7	熊本	47.5
千葉	52.0	兵庫	64.7	大分	49.1
東京	67.1	奈良	71.8	宮崎	61.2
神奈川	39.4	和歌山	63.6	鹿児島	49.8
新潟	54.2	鳥取	62.1	沖縄	37.5
富山	48.9	島根	66.8		
		全国	60.4		

【出典】小林信介（2009）「信濃教育会による満蒙開拓青少年義勇軍送出背景の検証（上）」『信濃』61(7),512頁。

【注1】因みに、1937（昭和12）年度から1945（昭和20）年度までの長野県全体では総数6,986人を送出したとされる（上田小県誌刊行会編（1968）『上田小県誌 第三巻 社会篇』小県上田教育会、318頁）。

【注2】「小県上田教育会昭和21年調査資料」によれば、1937（昭和12）年度から1945（昭和20）年度までの長野県下の送出者数（小県地域別）を見てみると、浦里（40人）、上田（33人）、依田（21人）、東内（20人）、神科・丸子（各17人）……の順に多くなっている（上田小県誌刊行会編（1968）『上田小県誌 第三巻 社会篇』小県上田教育会、318頁）。

4. 戦時物資活用協会からのお願い（1942年）

当然ながら、戦時中の物資不足は尋常ではなく、戦争用物資及び生活必需品確保を目的とした多くの物資の供出が求められた。長野県下では「鉄と銅をお国のために」という触れ込みで、財団法人戦時物資活用協会（長野県）が以下のようなお願い文を出している。併せて、表3のような「是非供出されたいもの」と「広く一般に供出されたいもの」に分類しながら、ありとあらゆるものが戦争のために活用されようとしていた。時代背景とはいえ、特に傍点箇所が当時の日本人の心境や思索の一端と、その一方で戦争を継続する口実の必要性を解説できる。

鐵と銅に動員令が下りました。鐵や銅は一國生産力の根幹であり戰爭資源の中樞です。一刻も早く國力を充實するために一貫目でも多く速かに國家に集めませう。激動する國際変局の渦中であって日本は今世界平和の為に又東亜共榮圈確立の為に聖戰の途上にあります。この大目的を完遂するためには今日に備へ明日に準備せねばなりません。政府が今度鐵銅の特別回収を実施することとなった所以です。勿論日本は今自給自足の製鐵生産拡充に急いで居りますが其の間の継がりとして是非必要なのであります。一般家庭は強制買上ではありませんが時局は各位の愛國心に基く供出を要請して居ります。第一線將兵の心を心とし切に絶大の協力を御願ひ致します。近日日を定めて買上にまゐります、左記より供出してください。(上田市誌編さん委員会編 2003:15、傍点筆者)

表3 戦時物資活用協会のお願ひ(1942年時)

一. 是非供出されたいもの		二. 廣く一般に供出されたいもの	
鐵製品 (玳瑁引ヲ除ク)	塀 柵(墓地柵ヲ含ム) 門柱 廣告板 門扉(墓地扉ヲ含ム) 溝蓋 車渡鐵板 廣告塔 手 摺及欄干 泥拭器 自転車置 (定着以外ノモノ) 破損止金 物 水桶(天水桶)	看板 格子 物干 床下換気口金物 帽子掛スタン ド 脚立 洗面器台 屑入 火鉢 千齒(稲扱 キ) 石炭用バケツ 喫煙用器具 ネームプレ ート コーションプレート其他標札類 傘立 暖房 装置前飾金物 焜爐 敷板 鈴蘭燈	
銅・真鍮	柵 門柱 門扉 押板 蹴板 破損止金物 手摺及欄干	看板 軒樋 呼樋 堅樋 壁張板(炊事場流場風 呂ヲ除ク) 郵便受口(木部取付以外ノモノ)	
砲金、唐 金等ノ銅 製品	泥拭器 水桶(天水桶、水鉢、 飲料水用除ク)	郵便受口(木部取付ノモノ) カーテン用金物(パ イプ使用ノモノ) 暖房装置前飾金物 焜爐 吊 下手洗器 帽子掛スタンド 傘立 喫煙用器具 屑入 茶器 花器 格子 薬罐 カーテン用金物 (パイプ用ノモノ) 軒樋 呼樋 堅樋 庇葺板 ネームプレート コーションプレート其他標札類 シャンデリヤ 洗面器 火鉢 洗面器台 置物 菓子器	
三. 以上の外小さなものでも又 日用品等でも不要のものや餘って居るものはお國の為に是非供出してください			

【出典】上田市誌編さん委員会編(2003)『上田市誌 近現代編資料(1)』上田市・上田市刊行会、16-7頁。

VI. まとめ——考察と今後の課題

以上、本稿では、1941(昭和16)年時における花里の職務内容及び思想形成について整理してきた。これまで、軍国主義、軍国教育、軍人氣質

などは、日本国憲法第9条「平和主義」に反するものとして、総じて否定的に捉えられ、とりわけ、社会事業史研究の一環であるホームヘルプ事業に関する人物史研究のなかではあまり積極的に論じられてこなかった。しかしながら、本稿では、戦後、ホームヘルプ事業の推進者として活躍することになる花里が、いかにして、軍国主義・軍人氣質を脱却し、平和主義や社会福祉の道を志向し得たのかの根本要因を探究するために、戦時下における彼の心境や役割を明確にし、どのような苦悩や考究をしようとしていたのかの洗い出した。今回、1941（昭和16）年当時の花里の生活や職務に着眼し、加えて、上田市の工場招致、上田飛行場の献納書、満蒙開拓青少年義勇軍の送出、戦時物資活用協会などの時代背景や地域的事情をも捉え直し、そうした時代の荒波や戦争という時局に翻弄された多くの人々が存在したことも確認できた。

一方、花里の個人史に着目した場合、21歳時の自分を同年齢で活躍した著名な古武士たちに準え、自分もそのような偉業を成し遂げたいと願ひ、1941（昭和16）年の新年拝賀式では、和衷協同、勤儉貯蓄、能率向上を旨とするも、「ある一時を以て、好む事物を思ふ存分やるのは大切でないか」などという松永先生の訓告に影響され（日誌：1941年2月10日）、学歴では劣るものの実力では誰にも負けぬように、「ジュラルミンの熱処理と組織」の研究に没頭しようとしたことが明らかになった。加えて、そうした工学領域のみの学びに留まらず、哲学や語学の意義をも感得し、その勉強に努めようとし、家庭内では妹たちとの関わりや母親の病状などを心配しつつも、徴兵検査合格や「現役兵證書」の到着など、戦闘モードに切り換えながら、花里自身、戦闘準備を推し進めていた。

花里にとって、母親の死は人生上でも極めて重大な事柄であったはずだが、戦時下という非常時では、そうした悲しみや憐れみの余韻に浸る余裕などあろうはずもなく、彼自身は出征までに自己の実験研究（7点）を完了させようと努めていたことが鮮明になった。「今の儘の家の状態であれば何一つ心配なく入隊できる。有難いものだ」などと記述に窺えるように

(日誌：1941年11月13日)、戦場に赴ける我が身の幸福すら実感していた花里にとって、日誌分析からは、当時の彼は平和や反戦ではなく、軍国教育の影響を受け、国のために戦う軍人としての気質や誇りすら感得していたと認識できた。このことは、戦時下における戦闘態勢を強いられた人々の宿命と言えるかもしれないが、少なくとも、この時点では、平和主義、民主主義、社会福祉といった考え方が、彼の内面には芽生えていなかったと結論づけられる。

なお、今後は史資料の限界はあるものの、戦中及び終戦直後の花里の心境や思考を探究し、戦争から平和へと主張や論考が大きく転換する契機になった出来事や場面に焦点化し、その変化のあり様を丹念に論証することが主な課題となる。加えて、全国で最多となる6,986人の満蒙開拓青少年義勇兵を送出した信濃教育会の戦後における実態や反省にアプローチすること、さらに満蒙の地における花里の暮らしぶりについても追究することとしたい。

注

- 1) 「夕方、有馬頼寧氏の新日本の発足と題する講演を、一同と共に聴取して実に感激、感嘆した」などと(日誌：1941年1月2日)、この頃の花里は聴取を重視している。
- 2) 「常に黙って居るが、こんなときには大いに云ひ、あばれる人が語れる人だと思ふ。しかしやはり常に口の少ない人は、こんなとき、又黙って居る。その一人は自分だ。兄がその分大いに働く。自分の前途につき、一層の考慮が佛はれる。又一人対策を練る。父、母の為、大いにやる處である。将来の目的に望を持って我は進まん」にも(日誌：1941年3月29日)、花里における自省や将来展望の一端が窺える。
- 3) 「整理的な業務をなした。現場のもの、自己研究すべきもの等、種々ある為に何処に手を付けてよいものやら、解らなくなる。この迷った状態は、終日続いた。

しかし、心身の休養が要ると認め、明日は休むことに決した。夕は、今度の昇格祝及び石淵君の入営の前途を祝福して中学出身者のみの宴会があった。大須の鳥三料理店であった」などと（日誌：1941年3月29日）、彼は自己研究の行き詰まりにも直面しているのが分かる。

- 4) 花里は、「母、かほる、春枝は防空演習の準備、自分一人は二階に立籠り、すきに勉強す。有難かった。午後になって正堂先生、乾先生に手紙をかく。而して公園に赴く。図書館にて本を読む。市公会堂に『新しき翼』の試写会あり。当会社に関係あるものなれば之を観る。大曾根工場の映写を見て、潔君を大いに思ひうかんで悲しくなった」などとも論じ（日誌：1941年9月16日、二重鍵括弧内ママ）、貴重な勉強の時間を大切にしようとする。
- 5) 「兄の病状余りよくなし。全く疲労しきった様な風付きにて、誠に重病人らしい様子を示して居り、少々心配になって来た。全員母の指導の下に、兄の看病に当る。母はやはり経験から来る厳たる看護方法を以て、之れに当られた。全く敬服せざるを得ない。八人を育て下さった母であるから、その間に於ける体験たるや実に偉大なるものがあり、その直接の教へを受ける最も期会を多く得るのは、何れにしてもかほるそのものである」などから（日誌：1941年5月1日）、花里における実母への畏敬の念を解読できる。
- 6) 「十一時半頃、防空演習下、避難訓練が実施された。自分も三菱自衛防護団の一員として、その警備に当る。西山技師に呼ばれて、以後の点焰部に於ける研究命令の作業を聞き、今進行やる研究実験を報告した。他は別として一心不乱に働く」などにも（日誌：1941年10月20日）、通常業務と自衛防護の双方に奮闘する花里の姿が読み取れる。
- 7) 「今年最後の興亜奉公日である。会社にては、例により国民儀礼を行ふ為、全員七時に集合せしめた。而して今回の月頭励行として、生活無駄排除なるものを掲げ時局重大を極める折から一層の奮闘を願はれた。自分は朝の用事を済まして、出勤したが、間に合わぬを知り、正三兄の自転車を借用。会社に向ふ」などからも（日誌：1941年12月1日）、戦地に赴こうとする花里が気持ちの整理に努めていたことが窺える。
- 8) 「坂屋店員で転職することについて正三兄に相談する人が訪れた。戦時、平和

産業に従事する人の職制に苦慮することはこの様に大なるものかをつくづく感じ、我身の幸福を知った」などと花里は記述し(日誌:1941年12月15日)、出征できる身の上に感謝の念を抱いている。

付記 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤研究(C)19K02172、研究代表者 中寫 洋)の研究成果の一部である。

史料

花里吉正(1941-1942)『当用日記』(1941年~1942年、本稿では日誌).
宮坂亮一編(1993)『和を以て貴しと為す——花里家の記録』花里吉見.

文献

荏原順子(2008)「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6), 1-11.
上村富江(1997)「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房, 247-57.
小林信介(2009)「信濃教育会による満蒙開拓青少年義勇軍送出背景の検証(上)」『信濃』61(7),512.
歴史学研究会編(1966)『日本史年表』岩波書店.
森 幹郎(1972)「ホームヘルプサービス」『季刊 社会保障研究』8(2),31-9.
森 幹郎(1974)『ホームヘルパー』日本生命済生会社会事業局.
長野県ホームヘルパー協会(1991)『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』.
名古屋航空機製作所25年史編集委員会編(1983)『三菱重工名古屋航空機製作所二十五年史』三菱重工株式会社名古屋航空機製作所.
中寫 洋(2010)「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本の地域福祉』(24), 71-83.
中寫 洋(2012)「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日本の地域福祉』(25),75-85.
中寫 洋(2013)『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい.

- 中寫 洋 (2014a) 『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美.
- 中寫 洋監修 (2014b) 『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会.
- 中寫 洋 (2014c) 『草創期における家庭養護婦派遣事業と家庭養護婦』『社会事業史研究』(45),31-45.
- 中寫 洋 (2019) 「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60(3),1-13.
- 中寫 洋 (2020) 「花里吉正の1940(昭和15)年——ホームヘルプ事業推進者における『孝』の道に焦点をあてて」『中京大学現代社会学部紀要』14(1),85-103.
- 日本看護歴史学会編 (2008) 『日本の看護120年——歴史をつくるあなたへ』日本看護協会出版会.
- 須加美明 (1996) 「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2(1),87-122.
- 竹内吉正 (1974) 「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』(46), 51-69.
- 竹内吉正 (1977) 「老人介護を考える——家庭奉仕員の現状▽5」『信濃毎日新聞(夕刊)』(34291), 1977年7月4日, 5.
- 竹内吉正 (1991) 「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会20年のあゆみ』第一印刷, 14-29.
- 上田小県誌刊行会編 (1968) 『上田小県誌 第三巻 社会篇』小県上田教育会.
- 上田市誌編さん委員会編 (2000) 『上田市誌 近現代編(7)——上田市民のくらしと戦争』上田市・上田市誌刊行会.
- 上田市誌編さん委員会編 (2003) 『上田市誌 近現代編資料(1)』上田市・上田市刊行会.
- 上田市社会福祉協議会50年の歩み編集委員会編 (2006) 『住民と共に歩んだ50年』上田市社会福祉協議会.
- 山田知子 (2005) 「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大学研究紀要 人間学部・文学部』(90), 178-98.